

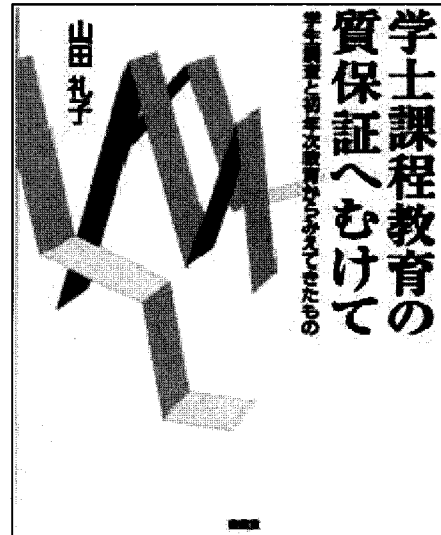
<会員による自著紹介>

学士課程教育の質保証へむけて —学生調査と初年次教育からみえてきたもの—

山田礼子

同志社大学

東信堂（2012年発行）
定価 3,200円（税別）



日本の大学の近年の変容は著しい。大学改革が大きな課題として取り上げられはじめた2000年代初頭からみると、現在の高等教育全体の姿はかなり異なっている。今や大学改革といえば教育改革を示唆するといえるほど、教育面を意識した改革を進めている。事実、2000年代以降における各大学の教育改革あるいは教育改善に向けての取り組みはかつてないほど進捗してきた。2010年以降では、そうした教育改善から教育の質保証というような流れへ進みつつある。

教育の改善を意識した大学改革の背景には、グローバル化した知識基盤社会のもとでの世界的な科学技術の進展と競争を所与のものとし、それに日本社会や日本の高等教育がどう対処していくべきか、そのために、いかに組織や既存の教育課程を変革していくのが、政策や個々の大学の方向性として確認されたことがある。同時に、こうした動向は日本を含めた多くの国々にとっての共通事項として認識されていることも現在の特徴であろう。言い換えれば、教育の質保証が日本のみならず世界の高等教育の大きな課題となっている。

本書は、こうした現状において、大学はどのように教育改革を進め、教育課程がいかに学生の成長に交差し、学習成果につながるのかを問題意識として取り上げ、現代社会が要求する「保証されるべき教育の質」とは何か、また教育成果としての学生の質向上は、具体的にどう測られるのかについて、筆者がこの10年間に主に研究課題としてきた初年次教育の効果、大学教育の成果を中心に実証的な学生調査データを用いて分析し、論じている。現代大学教育の焦点的課題を取り扱っている本書は、研究者のみならず多くの高等教育関係者にも参考となるものである。